

60年の歴史に 感謝しながら生き抜こう そして未来を切り拓こう

出来事

- 1月** ●第1回定時総会・例会(松山全日空ホテル)
●京都会議
- 2月** ●愛媛マラソン支援
●例会「青年経済団交流フォーラム」(ひめぎんホール)
- 3月** ●東日本大震災復興フォーラム
●例会「全国会員大会主催」(本町会館)
- 4月** ●わかづきファンダ受給者証授与式
●松山春まつりお城まつり
●例会「VMVセミナー」(松山市総合コミュニティセンター)
- 5月** ●憲法タウンミーティング
●例会「人間力開発」(松山市総合コミュニティセンター)
●愛媛ブロックスポーツ交流大会(法皇)
- 6月** ●第42回四国地区愛媛ブロック会員大会(大洲)
●第62回JCI ASPAC 香港
●第25回わんぱく相撲まつりやま大会
●例会「松山JIC60年の歴史を振り返る」(松山市青少年センター)
●四国地区会員大会(四万十)
- 7月** ●第1回臨時総会・例会「『松山のこぼのちから』を知る」
(松山市青少年センター)
●サマーコンファレンス(横浜)
●第28回わんぱく相撲全国大会
- 8月** ●松山JIC創立60周年記念式典
●「こぼのちから」プロジェクト(常盤同郷会)
●例会「出向について考える」(松山市青少年センター)
●道後温泉一番走り
- 9月** ●第29回まつりやま市民シンポジウム
●例会「新入会員入会式・正会員証授与式」
(松山市青少年センター)
- 10月** ●領土・領海意識醸成プログラム
●第61回日本JIC全国会員大会(北九州)
●例会「家族例会」(ウェルビア伊予)
- 11月** ●第2回定時総会・例会「●●●●●●」(●●●●●●)
●第67回JCI世界会議(台北)
- 12月** ●例会「卒業式・懇親会」(松山全日空ホテル)



▲1月 京都会議で創立60周年をPR



▲2月 ひめぎんフルーツ缶が配膳・接客を手伝ってくれた愛媛マラソンのお接待 (愛媛マラソン)



▲2月 松山から青年3団体の各全国組織の長を同時に排出



▲3月 雪がチラつく盛岡市で開催された復興フォーラムの参加メンバー

2012年 松山市の動き

- 2月 坂の上の雲ミュージアム来館者80万人達成
- 7月 坊っちゃんスタジアムでプロ野球オールスターゲーム開催
- 8月 第15回松山「俳句甲子園」で松山東A優勝



▲6月 マドンナみずとボンジュールグミで松山をPR (JCI ASP AC香港)



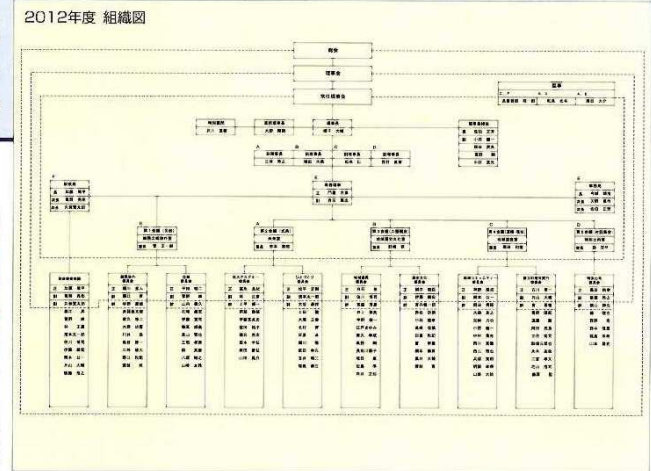
▲4月 松山春まつりお城まつりの武者行列



▲6月 卓話まる好勝負 (わんぱく相撲)



▲8月 一声にスタートする参加者 (道後温泉一番走り)



▲8月 創立60周年記念式典で披露された「なぎなた演武」



▲10月「焼きじゃこ天」が大好評! (全国会員大会北九州大会)

社団法人松山青年会議所2012年度理事長所信

社団法人松山青年会議所

帽子 大輔

長年の政治に対する不信と、変化に対する期待感で戦後初めての政権交代が生まれた。しかし我が国の総理大臣は任期が1年と定まっているかの如く次々と交代し、ひとつの貸任を全うしないまま現在に至り、我が国の未来への道標は未だ示されていない。

2011年3月11日14時46分、未曾有の東日本大震災が国民を襲った。地震被害だけでなく、津波被害、原発被害、風評被害に多くの人たちが苦しんでいる。このような状況に、国家が国家として機能していない現状に苛立ちを覚えている。被災した人々は前向きながらもその散々たる状況はとて涙なしでは見ることができない。政治は何をしているのだろう。政治はその責任を、我々国民はその責任を全うしているのだろうか。被災者はお互いに励まし合い、「生き抜く力と生かされることへの感謝」を持ち合わせ前向きに生きている。

はじめに

1977年に生まれた私は、高度経済成長社会の中でごく平均的な日本人として育ってきた。しかし、私は幼いころに母親を事故で亡くした。私が8歳、妹が3歳だった。葬式に訪れた人々を、状況が理解できない妹が満面の笑みで迎えるその光景があまりにも悲しく、今でも忘れられない。そのような私たちの環境を、周りの多くの大人たちは可哀そうだと思っていた。しかし私は一度たりともその境遇を不幸だと思ったことはなかった。それは母親がいない状況の中で巡り合った人の優しさに、常に感謝し前向きに歩いてきたからである。

「逆もまた真なり」

私の座右の銘であり、どのような時においても物事を相対的に見つめさせてくれる私のバランス感覚の原点である。自分と他人、地域と世界、利己と利他、過去と未来、その全てに因果関係があることを私たちは知っておかなければならない。実はその重要性を青年会議所に入会して初めて参加した例会の、最初の5分で教えてもらっているということ、ずっと後になって知ることとなった。それはJC宣言文の中にある「個人の自立性と社会の公共性が生き生きと協和する」ということである。このどちらかに偏っても私たちが目指す明るく豊かな社会の実現には至らない。私たちは混沌というマイナス要素を未知の可能性というプラスの要素に変え、生き生きとした協和を目指すのである。そして私たち青年は率先して行動することにより、個人の能力を高めながら、仲間としての団結力を養い、世の中のあらゆる問題を解決していかなければならない。

私たちの存在意義と責任を考えよう

私は入会当初JCに対して悪いイメージがあった。それは酒の飲み方や、礼儀作法についてだ。

しかしそのイメージはすぐに変化した。何故なら「JCが」ではなく、個人がJCの評価を下げ、個人がJCの価値を上げていることに気付いたからだ。つまりJCが社会に理解されていないのではなく、自分が社会に理解されるかどうか重要なのである。日本で私たちの運動に灯がとまり、60年という月日が流れた。その歳月を乗り越えた事実裏付けされるように、明るい豊かな社会の実現を目指すその理念は、古びることなく時代を経てなお今求められている。

私たちが生まれた1970年代は物がまだまだ不足をしていた。肉の入ったすきやきが贅沢だという時代だった。今から思うと高度経済成長やバブルも明るい豊かな社会の成功に思えたが、物質的な豊かさを得ながら精神的には貧困の時代を迎えたことに気づいたのはずっとあとの時代だった。現代社会はどうなのだろう。飢餓で苦しむことは減少してきたが、年々自殺者は増加している。メディアで映る六本木ヒルズやセレブな生活に幸せの幻覚を見ているが、身近な幸せを見失っている。リアルとバーチャルの境目が曖昧になっていることに気付かない。その大きな理由は自分が存在するコミュニティの認識がないからである。私たちは生まれた瞬間から家族というコミュニティの中で生きている。自分の存在が両親への生きがいを与え、親としての責任を負わせている。しかし、両親の存在から生きることへの感謝をもらい、子供としての責任を負っていることは忘れがちである。私たちは常にそのコミュニティの中にいる存在意義と責任をどれだけ自覚しているだろうか。私たちはこの組織に入会して会員としての責任を全うしているだろうか。入会した恩恵だけ享けていないだろうか。私たちは間違いなくその恩恵を享けている。それは入会して人と出会った瞬間から始まっている。そのことと同様に、所属するメンバーとして、市民に対してのJCとして、日本JCに対しての松山JCメンバーとして、それぞれの立場で自分の責任を自覚していただきたい。その自覚こそが最大のコミュニティである社会を構成する「ひと」としての責任に繋がり、主体的な明るい豊かな社会への実現に繋がるのである。

また今の時代は、私たちだけで物事を達成することが全てではないと考える。私たちの活動は行政や他団体、教育機関や地域の組織との相互コミュニティを連携させることにより、更に可能性を広げることができる。そのことによってより市民から求められる活動が行え、本当に市民から必要とされる団体となれるのである。そしてその活動の場において、私たちの存在意義を見出し、「JCらしさ」を発揮し、様々な学びの機会を与えてもらっているJCメンバーとしての責任を果たすことが必要なのである。

60年目の節目に

連綿と受け継がれてきた松山青年会議所の歴史において、60年という節目を迎える。昭和27年、先輩青年たちは敗戦という大きなショックの中に精神的支柱を失ったかに見えたが、常に進んでやまざる青年達は夫々の分野において活動してきた。そこに大いなる力を発揮せんが為に同志相寄り松山青年会議所を結成することになった。その志は60年という月日を過ぎても色褪せてはいない。それは先人たちの絶え間ない努力のおかげである。そして単年度制と40歳での卒業が、不連続の連続を生み出し、松山青年会議所が還暦を迎えてなお若々しくいられる理由である。私たちはこの機会に先人に感謝するとともに、過去を振り返り、未来を見つめなおさなければならない

い。また、私たちにはシニアクラブの存在がある。その存在は松山青年会議所の魅力のひとつであり、様々な分野において現役メンバーの心の拠り所である。私たちはシニアクラブとの交流を積極的に行い、先人の生の声を聞くべきである。そこには新たなコミュニティが生まれ、現役メンバーの人生においても最良の出会いになると同時に、相対的に自分を見つめる最良の機会でもあることは間違いない。魅力ある先人の存在に心から感謝する。この節目を先輩と仲間とともに迎えることにより、100年後も求められるJCとしての未来を描き、またその決意を固めるべきである。

「2020年まつやままちづくりビジョン」

市民意識の変革を推進する私たちの運動は、単年度でリーダーと組織を変えていくことにより、時代の変化に対応してきた。しかし社会から見れば、単年度制は関係なく、市民から見れば今日見ても、来年見ても同じJCである。だから私たちの運動は長期ビジョンをしっかりと持ち、単年度の個性を生かしつつ、ブレることのない市民意識の変革運動を継続していく必要がある。

2000年に私たちの先輩はまつやまに必要なまちづくりの指針として「2010年まちづくりビジョン」を策定した。まちづくりの柱を「環境、教育、産業、歴史文化、まつり、情報、地域コミュニティ、福祉」という8つの方向性を掲げて活動してきたのである。そして私たちは2010年を迎える節目にそのビジョンを検証し、10年先の未来に繋がる「2020年まちづくりビジョン」を策定した。その基本コンセプトは地域コミュニティ、歴史・文化、ひとづくり、地域振興の4つのビジョンが補完しあうクロスビジョンという構想である。私たちはこの長期ビジョンをしっかりと理解し、市民意識の変革運動を推進していかなければならない。そして来る60周年、全国大会、そして10年後とそれぞれの機会にもビジョンと向き合い、一年一年の確かな一歩を踏み出していくべきである。

全国会員大会について

私たちは公益社団法人日本青年会議所が主催する、2014年度第63回全国会員大会の主管が決定している。その大会には3つの目的が提唱されている。それは会員の運動意識の高揚、開催地域の活性化と市民意識の変革、世論を確実に動かし、社会にポジティブな変化を巻き起こすということである。これは自分の成長が地域の成長や企業の発展に繋がり、ひいてはこの国を元気にしていくというJC運動のロジックそのものであり、まさに最大のJC運動である。だからこそ私たちはただ全国大会を開催することだけが目的ではないことを、理解しなければならない。

まず、私たちは全国大会を通じて、どのように地域を活性化させるのか。真剣に議論を重ねなければならない。大会4日間だけの経済効果だけでなく、継続的な地域経済・地域産業の活性化を図るべきである。また人の心の拠り所となるものを生み出すことを考えても良いと思う。今の時代の活性化の方策は観光だけでなく、例えば「癒し」や松山市が提唱する「ことばのちから」もひとつの産業になりえる。重要な考え方は市の政策にもある交流人口の拡大をすることである。松山市は市町村合併により人口が50万人を超えたが、人口の推移は数年前より横ばいもしくは微減する年が続いている。少子高齢化による定住人口の減少が進めば、地域の経済は衰退をたどる一方である。そのために交流人口をいかに増やすかが重要である。その地域に行く目的は通勤・通学、買い物、

文化鑑賞、学習、習い事、スポーツ、観光、レジャー、アミューズメントなど様々であるが、継続的にその街に訪れるものを生み出すことが必要である。そのためには、私たちはもっと我がまちの眠っている誇るべき「だから」を知るべきである。一体何に価値があり、何が今の時代に求められ、何によってひとは動かされるのか。私たちは JC の活動を通じて日本各地に赴き、見識を深め、自分たちの地域の「だから」を知る必要がある。

そして、私たち自身は大会の開催を通じて何をしようとしているだろうか。全国大会への道のりは困難であることは言うまでもない。松山らしい大会にするためには地域の魅力を再発見し、メンバーと徹底的な議論を交わし、市民との積極的な交流を通じて、信頼関係を築かなければならない。全国の会員に大会に参加してもらうためには、様々な場面で松山大会を PR しなければならないし、四国地区協議会のメンバーに主体的な副主管としての協力を得るためには、四国地区内の各地会員会議所のメンバーと交流し、納得いくまで議論を重ねなければならない。しかしその全てを成し遂げることができれば、市民や全国の会員、四国地区の会員との繋がりを絆に変えることができる。その絆と達成感こそが私たちが得る最大の益である。そしてその時に初めて我々はこの誰よりも強固な友情を手にすることができるのである。そのためにこだわりたいことがある。それは我々松山青年会議所の全メンバーで全国大会を成し遂げたいということである。しかし、それぞれが協力できる度合いは、環境や立場、経験によって違うだろう。それを私は一律に求めてはいない。しかしみんなの歩幅が違うことを認識したうえで、それぞれの歩幅で協力をしてもらいたい。そのことが必ず我々の強固な友情に繋がると信じている。

会員拡充と団結力の重要性について

全国拡大は全国の青年会議所が抱える最大の課題である。その会員数は高度経済成長が止まると同時に減少をしてきている。民主主義において数は力である。数の減少は力の衰弱を意味する。私たちはこのまま衰弱していいのだろうか。私たちは青年会議所の恩恵を享けているはずだ。それは先人が築き上げてきたものである。その恩恵を次代のメンバーに繋げるためにも会員の拡大をしなければならない。よく会員の質が先か量が先かという議論を聞くことがある。まさに卵が先か鶏が先かである。しかし徹底した議論をして答えが出ないならば、どちらも正論である。卵を生み出せば鶏が育つし、鶏を作り出せば卵が生まれる。今我々に必要なのは、JC をどのように人に伝えるかである。そしてその魅力を伝えると同時に、魅力ある JC にするために努力することも忘れてはならない。私たちが魅力あるひとづくりを続けている限り、私たちの必要性が途絶えることはないと考えよう。このことは会員拡大が JC 運動の根幹であると言われる所以である。そしてひとがまちをつくり、まちがひとを育てるというその土壌を、私たちがしっかりと作らなければならない。

また、今世の中に必要なものは団結力である。このことは今の政治を見れば明らかである。手法を議論することだけに終始し、目的を達成することを忘れている。目的を達成するために必要なもの、それは団結力である。徹底した議論の果てに、答えが出なければその時点で答えは出ている。それは行動すること。その為には団結力を持ち合わせる事が現在の個性が多様化する社会を切り拓くキーワードである。現代では時にガバナンスとも言われるが、シンプルな問題の答えは

複雑であり、複雑な問題こそシンプルに答えを出すのが良いと考える。

出向と会員大会について

最近の会員大会の参加においては動員が目的だと伝わったり、出向が負担だと伝わったりする傾向が続いている。しかしこの二つは相対的に自分と地域を見つめなおす短期的、中期的手法なのである。各地の会員大会に赴けば、その地域とその地域の市民性に触れることができる。そのことによって初めて自分自身と自分の住み暮らす地域を知ることとなる。出向をすれば、グローバルな社会を実感することができるし、そのことによって見識が広がり、ひいては自分自身の研鑽や自信に繋がり、地域の愛着心や誇りとなるのである。

また出向は多くの人との出会いの場である。出向できるかできないかは、環境やタイミングによって人それぞれである。しかしその機会が訪れたとき、是非前向きに考えてもらいたい。そのような機会が 40 歳を過ぎてでもあるとは限らない。出向も JC の魅力のひとつであることは間違いない事実である。

理事長としての覚悟

私は 2006 年に入会をした。経験で言えば、JC をもっと理解しているメンバーは他にも多くいる。しかし私が理事長をしなければならなかったのは 1 年前にさかのぼる。当時「今全国大会に向けて手を上げるべきか、時期尚早か」そのような議論になった。最終的に大多数のメンバーが大会の魅力を理解し、大会の成功を信じ、賛成多数で全国大会主管立候補が総会で決議された。しかしそこには説得力が欠けていた。それは決議をしたメンバーの多くが大会当年度には卒業しているという現実があったからである。私は大会開催までに 3 年を要する全国大会を成功させるためには、「決断をした世代」と「大会を遂行する世代」を繋ぐ、「決断し大会を遂行する世代」のリーダーの必要性があると感じた。だから私がその世代と世代を繋がないといけないし、その全ての責任を全国大会が閉会するその日まで全うしたいと思っている。何故そのような思いを持てるのか。それは JC での様々な出会いが私の人生に多くのものを与えてくれているからである。私はそのお返しをしたい。どうかこの松山青年会議所のために働かせていただきたい。そして、皆さんとともにこの時代を生き抜いていきたい。

我が国の未来

私たち青年会議所は政治的中立を解釈する中で、政治に関与することを避けてきた。しかし、私は JC の世代の人間こそ政治に関心を持たなければならないと思う。本来居酒屋で JC 論を語り明かすより、まつやまの未来や我が国の未来を語る事が大切であるはずだ。ただ、まつやまの未来を語るためには日本を、日本を語るためには世界を知らなければならない。もし夢や理想を語るのなら必要ないだろう。しかし、今求められているのはリアルな社会を知り、そのうえで先のビジョンを描くことである。私たちはまだまだ学んでいかなければならない。それはあらゆる世代の架け橋である青年としての責任である。何を学ぶべきか。それは JC ではなく、社会そのものである。

そして、私たちの未来は私たちが切り拓くべきである。

今日本は東日本大震災と原発の事故により、多くのものを失っている。私たちはその現実を知ってなお、未来を切り拓いていかなければならないし、日本の未来は我が国民が、まつやまの未来は我々市民しか変えていくことはできない。今まさに生き抜く力と生かされることへの感謝を持ち合わせ、励まし合いながら生きていこう。

がんばろうまつやま

がんばろう日本

まつやまの未来も日本の未来も
私たち青年にかかっている。